

3001

世界三関ヶ原

昭和十八年七月十九日



3002

賊軍羅馬城を盲爆す

サン・ロレンツォ粉砕さる
昭和十八年七月二十一日



血はや降る、神の威を
借る法王よ
天のバチカノ
思ひ知らずや

ローマ法王



3003

伊太利革命

ムソリニ退却
バドリオ進出

昭和十八年七月二十六日



檻禁
たれさ
ムソリニ
リニ
ヤク
大變か
ことにあつた。
伊太利滅亡は
眼前ではふいか。



バドリオ
俺が伊太利を背負つて立
つのだが、荷が重過ぎる。
ファシスト党は解消す
る陸海空軍総帥ハ
国王に返還するんだ
がウマク行かぬら



3004

皇軍敵空軍基地を屠る

昭和十八年七月二十七日



● 空軍基地
— 空軍路



3005

ルーズヴェルトの正夢

昭和十八年七月三十一日

「黙つて
クダバレ」



「アッ!
命斗り
はタ...
タスケテ
...」

3006

緬甸獨立・英米に
宣戦す

昭和十八年八月一日



「世界の各国より承はれ、今日日本の
支援に依て独立を完成した。
我は緬甸国政府の總理
バーモである。」



3008

伊・獨苦悶

昭和十八年八月九日



英米
無條件で
降参しろ。

伊
獨この前
で即答は
困るね
待つてくれ

獨





3009

米空軍北千島を窺ふ

昭和十八年八月十二日



伊太利に到る痛手

臨泉十六年八月十日





3011

動物の殉死

上野動物園の悲哀

昭和十八年八月二十一日



3012

立秋

昭和十八年八月二十三日



決戰策成備未成
蠻賊醜敵不可輕
驚破武陵桃源夢
颯々秋風是爆聲

忠太

3013

忠霊皇軍を護る

昭和十八年八月二十三日

キスカ島撤収

アッツ島の
忠実濃霧を
排つてキスカ島
撤収の勇士を
護送す



3014

敵軍南島島來襲

昭和十八年九月一日



南島島、東京を
距ること約二千キロ
島の大は周囲十三
キロ、海面高さ五米
の珊瑚礁、椰子等の
他の植物及礦物あり
住民日本人五名

敵軍
ヤー日本が見えへる。
ア、山が見えへる。
東京はド、迎へしう。
ア、ナイ、ア、ナイ！
名カリ行くと
みち殺しは
逢ふぞ。

日軍
果たぞ、
みち
殺し
にしてやれ



3015

西東本願寺提携

昭和十八年九月一日



光照法主(西本願寺)

「これから中ようして
何か一しよにやりまはさう、
これも戦争が
とりもつ縁や
さかえさ。」

光照法主

(東本願寺)

「至極宜しな、

わたい何もわかりま

へんよって、あんた、

たのんまつせ。」



3016

異句同音

昭和十八年九月四日



一億一心一國一振

一德一新一族一身

一刻一針一辱一憤

一克一忍一食一飲

一浴一寢一跣一眠

一曲一沈一直一駸

一力一進一燭一斤

一讀一親一則一吟

一祿一貧一玉一輪

一盡一金一漬一銀

一賊一侵一觸一震

一翼一據一慾一釁

一屋一陣一谷一深

一足一緊一目一顰

一告一禁一獄一躡

一復一凜一北一晨



3018

秋氣清

昭和十八年九月八日



霜滿茅廬秋氣清
數行敵機月三更
北嶽併得南溟景
遮莫萬里憶遠征

鐵邊壇上代筆廬身公

月落中海霧滿天
管制燈火對愁眠
羅城內外三千寺
夜半警鐘到客船

伊國水鄉假泊



3019

伊太利無條件降伏

昭和十八年九月九日



⑧

コラ、
何處へ
行く？

⑨

馬鹿！

⑩

僕はモ一戦争は
止めたよ、米英の
おぢさんと
逃ぶんだ

⑪ ⑫



3020

伊太利寸断

獨軍羅馬を占領す

昭和十八年九月十日



希臘

アルバニア

モンテネグロ

豫想する
伊太利の形勢
獨軍の領土
米英軍の領土
伊太利の領土
何處に在りや

ユーゴスラヴィア

瑞西

佛



3021

鳥取地方激震

昭和十八年九月十日



3022

獨軍奮闘 爭奪戦

昭和十八年九月十三日



獨

米

英



伊

「隣の
あたり、
何を
サレル
か？」

3023

ムソリニ救ひ出さる

昭和十八年九月十三日

ヒットラーの策謀



ムソリニ
三日見
ぬ間に
秋の風
じゃあ

「ヒットラー
總統が
お待ち
兼ねですよ」



3024

敵復た北海を襲ふ

昭和十八年九月十三日



田皇軍は
撃B24五機を撃
破B25二機を大
破せり
その他合計
十一機を
撃墜破
せり



十二日午
前九時頃
敵はコシロ
デールド B24 六機、
イスアガカン B25 機
合計十八機の編隊
にて北千島に未襲
した。④

3025

言語不通

昭和十八年九月十五日



『どうも、その罐つめを一つ、
一つ丈で結構ですから、賣つて下さい。
後生ですから。』

お金はいくらでも差上げます。
失礼ですけど、
一つ百円でいかがでしょう。
是非入用なんですから、
どうぞ一つ
賣つて下さい。



『何だ？人を馬鹿にするな、
金あら何千両積んだつて
賣れぬ物は賣へら
あいのだ。失礼だが
百円で』とは
何の事だ。ペラポーめ。』



3026

一卓食費金二萬四也

昭和七年九月十六日

(北京某料理店)



支

どこ迄

昇るかインフレ

輕氣。成層圏

も突破して。宇

頂天まで突き抜けて。

復た落ちて来る

難物は。電速

降下の爆弾が。

穴賢こ。

日

晝食金五十円乃至

百円也

某料理店



3027

大和丸

東支那海
に於て敵
潛艦の爲に

撃沈さる

昭和十八年九月十六日



3028

惡逆か暗愚か

伊太利の
場鳥尾

昭和十八年九月十九日



在死地理夜

偶感 暗智陰秀

順逆多鬼門
怪道乱心源
七十餘年夢
未覺惑歸元

場鳥尾

我が身で我が身が

わからぬ。魔が
さしたんだ。その魔
が意外にも米英らしい

様に思へる。

實に不思議

千萬である。

国王は何んこ

して居るか、

それは問題で

あいが問題は

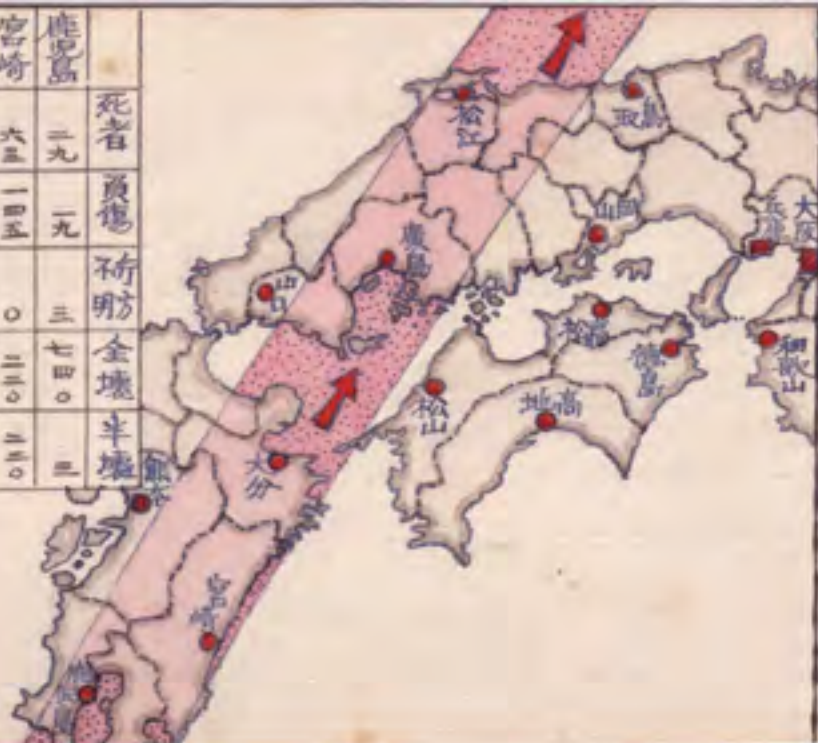
魔術師ムソリニだ。



3029

西南日本颱風

昭和十八年九月二十二日



島根	廣島	大分	宮崎	鹿兒島	死者	負傷	祈明	全壊	半壊
五〇〇	二二	一六九	六三	二九	一九	一四	二〇	三〇〇	三〇〇
四八	三二	六〇	一四五	一九	三	七四〇	二二〇	二二〇	三〇〇
一四	三二	六六	〇	三	七四〇	二二〇	二二〇	三〇〇	三〇〇
二〇	四一〇	四〇〇	二二〇	二二〇	三	七四〇	二二〇	二二〇	三〇〇
三〇〇	一九〇	三〇〇	二二〇	二二〇	三	七四〇	二二〇	二二〇	三〇〇

3030

下剋上

昭和十八年九月二十七日



父子



おとうさん、
又かび
の生ひ
たが談
議はあ
よふさいよ。

師弟



先生！
それは
ミシナ
間違
つてあ
らあ。

尊卑



今時子爵もミシタ
もあるもんか。
シカリ
して
おくん
あさい。

長幼



おぢさん
の言ふこと
は一つ
あてに
あやな
いや。

貧富



貧乏
でも
一国民
として
君
と同格
だよ。

主従



社長さん、
ボンヤリ
してると
會社は
つぶれる
よ。

3031

新伊太利國

ムソリニ・ファシスト
共和国の總理とふる

昭和十八年九月二十七日

馬鹿のバドリオ米英に。そのかさねた勿怪
の幸ひ。こゝにファシスト共和国。新伊太利
の無双の總理。ムソリニの姿

これ見よや。



3032

世界一日本

昭和十八年九月二十八日



日本

B式
智能検査
試験成績

昭和十三年

ホタル

サンラランシスコ

ロス・アンジェルス

の小学校にて
試験の成績北歐人
(スウェーデン、独、英)

東歐人

スラヴ民族

南歐人
(葡西、佛、伊、希等)

黒人

日本人	49.77
北歐人	44.72
東歐人	43.23
南歐人	28.86
黒人	26.86



リヒャルト・ゾルゲ(49)	死刑
尾崎秀實(42)	ク
ブランコ・ワークリッチ(39)	無期懲役
マックス・クラウゼン(43)	ク
アンナ・クラウゼン(45)	懲役三年

ゾルゲ
「辞世の一句
を御許し下
さい。
沈み行く
闇の世界の
果見れば
日出る方に
日本の国
(忠太代作)



3033

逆賊の極刑

国際諜報園

昭和十八年九月二十九日



逝ける人

自七月一日
至九月三十日
昭和十八年九月三十日



吉岡直富六一	田口省吾四七	龜岡豊二七五	若林彌一郎七〇	跡見玉枝六六	綾井樹五二	林木雄五	中島文次七〇	青木重誠七〇	木村準二五二	三宅花園七六	秦勉造六七	大久保利武七八	島田墨仙七六	宮島大八七七	富田富美走五三	牧田環七三	周復	鍋島直和	子シゴルスキ一	山田玄太郎七二	朱深五	加納茂一	田中敬信七七	荒木古童四三
--------	--------	--------	---------	--------	-------	------	--------	--------	--------	--------	-------	---------	--------	--------	---------	-------	----	------	---------	---------	-----	------	--------	--------

野村益太郎五八	神田退四三	木村重行七六	二保亀松七六	木村榮七四	望月謙七九	兒玉花外七〇	鈴木梅太郎七〇	岩村深次郎六〇	野村龍太郎八五	永田秀次郎六八	中村勝	馬淵鏡太郎七六	岩井長三郎六二	吉川春太郎六二	橋本静水六八	大谷友右門五八	井上利助七四	神田辰之助五二	伯伏見博英	小泉親治六六	岩倉久子八六	市原通敏四五	柴田善三郎六七	島崎藤村七二
---------	-------	--------	--------	-------	-------	--------	---------	---------	---------	---------	-----	---------	---------	---------	--------	---------	--------	---------	-------	--------	--------	--------	---------	--------

3035

京童の落書

昭和十八年十月二日



法文系の大学は閉鎖
 商工省と企画院は廃止
 自沈した巨船^{鐵道運輸中斷止}は伊國
 電車の乗客數は日本
 大學院に特究生四八〇人
 北支の餓殍一日平均五〇人
 科學技術動員



「僕は
 漫文が
 好きだ

僕は漫
 画の
 力だ

3036

関釜線の崑崙丸撃沈さる
 沖の島附近・搭乗者六六名・生者三名
 昭和十八年十月五日二時



3037

比率貧國獨立

昭和十八年十月七日



比率貧

「おかげ様で

独立が出来ました。

ど覽の通り離れ島の

弱国です、宜しく

御後援を

願ひます。



日本

いやお互ひに

離れ島じゃよ。

しつかり仲よく

働らきましょ。



3038

配給又配窮

或は廢給とも稱す

昭和十八年十月十五日



農民

縣外搬出
が嚴禁さ
れてゐるで
この五万貫
目の芋が
この通り
みんな腐
つてしまつた
ではあいか。



都人

「やれく

やと一

ツ芋が

配給さ

れたと思

へば、この

通り腐

つてゐる。



3039

敵軍漸く眞劔

双方互角の
成績と見らる

昭和十八年十月十七日



3040

六十四校の學徒出陣勢揃ひ
○萬名の學徒出陣勢揃ひ

昭和十八年十月十九日



皇軍復討賊
投筆執銃劍



3041

昔

法文と理工の今昔

昭和十八年十月二十一日



3042

交通事故頻繁

可怕当事者
の疲憊喪神

昭和十八年十月廿六日



常盤線
土浦駅に於
ける列車三本
折り重ふつて轢
覆死者百五十名餘
以上傷者不詳



3043

中野正剛自殺す

昭和十八年十月廿七日



生きて皇恩に報ふること能はず。
死して悪鬼とあつて
敵黨を塵にせん。



志士ある哉、中野、
四時致々として、
獅子吼して止まらず、
遂に死して、
私思を遺さず、
志士ある哉、中野、

3044

第十三回臨時議會了る

昭和十八年十月二十九日



東條

「諸君は予を信頼せよ、漫りに質問を發すること勿れ、妄りに駁辯を弄すること勿れ、」

甲「東條は益々元氣旺盛だね」

乙「イヤ、大分神聖過敏にあつたね」

丙「相かはらず大目見得だね」

丁「あれが唯一の手じゃ」



3045

疎開強制

昭和十八年十月三十一日



昔



サア早く早く来い。花の都の東京へ早く来い。田舎にくすぶる馬鹿者ども、サアサと早く東京へ来い。

今



サア早く立ち退け。アブナイ東京にマフクわてめる馬鹿者が居ろか。早く田舎へ行つてインビリといふ。空気を吸ふがいの。

大決戦新ギニア島とモロソ群島
昭和十一年一月 3046



3047

孫文の幽霊

昭和十八年十一月一日

孫文の幽霊

己れ汪奴め何を

愚図と云してゐる、

最早首鼠兩端は

許されまい、敢然蔣

を説得して、亡びん

とする中国を

救はぬば

おらぬで

かいふは

おらぬで

おらぬで

おらぬで

おらぬで

おらぬで

おらぬで

おらぬで

おらぬで

おらぬで

おらぬで

おらぬで

おらぬで



己れ
蔣奴め、
俺の三民主
義を何と心
得てゐる、米
英に鬪弄されて
日本と戦を挑み自己の
利を貪つて中国を賣
らんとするとは何事じゃ、
神機一轉して即座に抗日を止めろ。



3048

内閣改組

昭和十八年十一月一日



東條
これぞ
うまく
行った
つゆり
だが



3049

重慶死に瀕す

昭和十八年十一月二日

重慶物價表

品目	定價元單位
タツカ 支那製二瓶	五〇〇
ウスキー 外國製一箱	四〇〇〇〇
支那煙草 平均一本	一六
コーヒー 一ホツ	六〇〇〇
コーヒー 一杯	五〇〇
絹靴下(並) 一足	二〇〇〇〇
同 (上) 一足	二五〇〇〇
シャツ(支那製) 一枚	八五〇〇
齒ブラシ(金無雙) 一本	五〇〇
同 (金無雙) 二本	三五〇〇
石鹼(支那製) 一個	二五〇
同 (舶来品) 一個	一〇〇〇
口紅 一本	一〇〇〇〇
晚食(定食) 二前	二〇〇〇
同 酒つき 二前	四〇〇〇
乗合自動車賃(相場)	一〇〇〇
人力車 一前	一〇〇
靴 一足	一五〇〇〇
食用幼兒 一人	?



重慶軍
「何か食はして呉れよ」と戦してもいふ。



3050

印度獨立運動

チヤンドラ・ボース
 印度政府を昭南を設
 昭和十八年十一月三日



3051

大東亞六ヶ國會議

昭和十八年十一月五日



① 日本国

総理 東條英機
大臣

② 中華民國

国民政府 汪精衛
行政院長

③ タイ国

総理大 ワンワイ・タヤコン
臣代理

④ 満洲国

國務総 張景惠
理大臣

⑤ フィリピン国

大統領 ホセ・ラウル

⑥ ビルマ国

総理 ウー・バー・モウ
大臣

陪席者

スバス・チャンドラ・

ボース



3052

餛飩だ饅頭と煮こぼる 総面積約五百方里
人口二萬

昭和十八年十一月六日



ボース

「餛飩だ饅頭に煮こぼる」は
うまそうですか。
有り難く頂戴
致します



東條
「勿論、
俺の進上し
たものに、マツイ
ものは無いで。

3053

第二次ブーゲンビル島空戦の大勝利

昭和十八年
十一月九日

加追果戦

軍敵

撃沈

撃破

戦艦

大艦隊

大艦隊

大艦隊

大艦隊

大艦隊

大艦隊

大艦隊

大艦隊

大艦隊

大艦隊

大艦隊

大艦隊

大艦隊

大艦隊

大艦隊



軍	敵	
	撃破	撃沈
自艦未帰還	戦艦(安芸丸) 大艦隊(大艦隊) 巡洋艦(大艦隊) 大艦隊(大艦隊) 大艦隊(大艦隊)	戦艦(安芸丸) 巡洋艦(大艦隊) 輸送船 輸送船
一五機	二機以上 三機以上 三機以上 三機以上 三機以上	三隻 二隻 二隻 四隻 四隻

3054

阿修羅王の奮闘
空戦戦果

昭和十八年十一月十七日



空母 三
迎艦 三
大型軍艦 一
我が損害 五機

3055

マキン・タラワ諸島の激戦

昭和十八年十一月二十三日

●ヤルートの野郎を

突ま

伏せて

ヤルード



④ 決戦手如きハ
相手にするに
タラワン。
さあ来い。
マキンぞ

海軍	航空	陸軍	海軍	航空	陸軍
中隊空母(大)	大空母(大)	中隊空母(大)	中隊空母(大)	大空母(大)	中隊空母(大)
戦艦(大)	戦艦(大)	戦艦(大)	戦艦(大)	戦艦(大)	戦艦(大)
空母(大)	空母(大)	空母(大)	空母(大)	空母(大)	空母(大)
空母(大)	空母(大)	空母(大)	空母(大)	空母(大)	空母(大)
空母(大)	空母(大)	空母(大)	空母(大)	空母(大)	空母(大)
空母(大)	空母(大)	空母(大)	空母(大)	空母(大)	空母(大)
空母(大)	空母(大)	空母(大)	空母(大)	空母(大)	空母(大)
空母(大)	空母(大)	空母(大)	空母(大)	空母(大)	空母(大)
空母(大)	空母(大)	空母(大)	空母(大)	空母(大)	空母(大)

我が方損害

一五機

3056

米小田原評定

昭和十八年十一月二十八日



①日本の勇力猛は

只事でない。到底
勝ち味はないと思ふ。
何とかして戦争を止
める工夫はないかしら。

②日本の頑強には

呆れるが。
結局永續し
ないだろう。
根気くらべて、
最後の勝利を得
ると思ふ。

③六ヶ敷

い所だ
よく考
へて見よう。

④日本の奮闘力は

恐ろしいが、今更
引つ込むとけるは
行かん。遮二無二
突進して見たら
ドーだ。安外勝てる
か、知れないうと思ふ。



3057

三国日本に無條件降伏強要を図る

昭和十八年十二月二日

埃及會議

③「亭主がググて
ダメですから、
あふた方のお力で
早く日本を叩き
つぶして下さい」

④「日本に無條件
降伏を勧告して
見よう。
イヤと言ったら
叩きつけるぞ」

⑤「これが善い。
日本が降伏
したら第三
流の農民国
に叩き
おろし、
日本
本土以
外の勢力
圏の土地を
没収するんだね」





3058

量と質
ギルバート群島の
盛戦

昭和十八年十二月二日



3059

敵軍マシーナル群島に迫る

昭和十八年十二月八日



日本は近いぞ、
遮二無二
突ッ込め。



3060

四選を狙ふルーズヴェルト

昭和十八年十二月十日



俺は今こそ米国大統領に非ず、
全世界の大統領じや。

俺に代るべき大統領

が何處にあるか。

斗筭の蠅めら

何を

ザク

騒ぎ

居る。



3061

ヤンキー嬢

ラバウルで
飛行機の不時着で
捕虜におつた女

昭和十八年十二月十一日

「呆れたお轉婆
嬢だぞ」

「今度の戦争ハ

又と見られ

ない競

技だ

から

スリルを

満喫しやうと思つて、

見物に来たのさ。それに、

戀して居る男にも逢へると思

つたのよ。早く逢はせて頂戴。

捕虜にするおんて、おんまりひどいわ。



3062

餓鬼喰人

昭和十八年十二月十六日



ソ聯の餓鬼

「ナンダ？手メーは
死人を喰つてゐるのか、
俺は生きてる奴を
殺して、おままで
喰ふんだ。
脳味噌の味ハ
こいられ
ぬーよ。」



支那の餓鬼

「俺ら餓死し
た奴を拾つて
喰ふんだが、
相當にうまい。
死人の身についた物ハ
タモト糞までかき集
めて喰ふと、相當に
金にある。」



3063

米の南米搾取

昭和十八年十二月十九日



「有つたけ
みんふ出せ
出と殺る奴
は容捨あく
たつき斬るぞ。」

3064

マキンタラワの皇軍玉碎

昭和十八年十二月二十一日



皇軍三千
軍属千五百
敵軍五萬
衆寡敵
せず、
刀折れ矢
盡きて
玉碎す。



3065

閉口

昭和十八年十二月廿七日



官吏

「収入が激減する
のに際限なく
搾り取られる。
瘦せる斗りて
閉口だ。」

運命の神

「左から零細の金
を搾取して、
右の富貴家
に貢
かにや
あらんとは。
あゝ閉口じや。」

事業家

「又二億円
の光臨は
有難いが、
使ひ切れ
まいのが
閉口じや。」



3066

前代未聞の除夜

昭和癸未除夜



實にや

水のとの

羊の歳

を猿ふれば、

四海波立ちさわぎ、

音も聞かえぬ、

除夜の鐘、

心憎くや

門の戸此、

松さへ見へね、

春は来ぬ。



逝ける人

自十月一日
至十二月卅一日

昭和十八年十二月卅一日



山岸光宣 七
 池野成一郎 六
 大林義雄 五
 辰馬吉左衛門 六
 加藤鯛一 五
 助川啓四郎 五
 中澤岩太 六
 田中弥助 六
 鶴沢字八 七
 柳原愛子 八
 三輪信太郎 九
 松井郡治 七
 中田敬義 六
 小檜恕一 三
 田邊日孝 六
 中野正剛 五
 岡鬼太郎 三
 湯口昌英
 山口爲太郎 三
 高杉瀧藏 三
 田村虎藏 三
 久田益太郎 三

候

西晉一郎 七
 管虎雄 八
 堤正義 六
 井上辰九郎 六
 小布施新三郎 七
 淺見倫太郎 六
 德田秋聲
 井上孝哉 七
 鈴木島吉 七
 佐上信一 三
 龍口了信
 牧野元次郎 七
 鍋島直映 七
 本田仙太郎 七
 藤崎又兵衛 六
 村井三雄藏 五
 三井元之助 六
 吉田義輝 七
 松本赤太郎 七
 高木友枝
 野間口兼雄 六
 佐々木勇之助 六

3069

昭和甲申

昭和十九年元日



猿は猿でも
たいのモンキー
ではふい。
皇国日本
に仕へまつ
るまのえの
申である。
昔もろこしの
孫悟空の傳授により、筋斗雲に乗て
太平洋をひと飛びにし、金箍棒を振
つて米國を叩き潰す秘術を心得てゐる。
敵を亡ぼすことは朝飯前である。

3070

玉手函

昭和十九年一月三日



玉手函

あけて

目出度し

目出度くも

ふし

我は老ひずも

敵去りやらず



3071

米魔執拗

昭和十九年一月九日



3072

木石孰れか強

昭和十九年一月十二日



百竿の樹、振る
當にソ聯を
潰倒すべし



千鈞の石、飛ぶ
應に独を粉砕
すべし



3073

チアノ伯等死刑に處せらる

昭和十九年一月十二日



判官

「その方儀

グレンジの決意に

署名し、

バトリオをして

タリテターを遂行

せしめ、ムソリーニを

陥れたる條不届千万

につき、他の五名と共に

死刑申しつくる。

チアノ

「マ、待つて下さい、

私は決してそんな

陰謀を企てふ

のとはど座いません。



3074

途方ちうほう邸宅設計

昭和十九年一月十四日



3075

熱川

昭和十九年一月二十四日



Copyright 日本建築学会



朝不らけ

伊豆の海

見れば

三原山

麓につとう

船ニッ

三ッ

3076

アルヘンチナ遂に樞軸と絶交す

昭和十九年一月二十八日



米

「兎に角絶交

させてやつた、

これで安心

した。

亜爾然丁

「どうく君等

と絶交しかけ

ればあらなく

あつたよ。

それは、その……

そう分つてゐる

だろう……

ドリン悪し

からず。

日本

「よく

分つてゐる、

絶交結構、

一向平氣じゃ。



3077

決戦時機に於ける吏員

昭和十九年一月三十日



〇〇省属官

甲「時節柄毎日火鉢にかぶりついて雑談斗りやつて居るのは気が咎めるね

乙「でも長官から仕事を命じて呉れぬから仕方がない

丙「どこかへ轉任させて貰つて、少しは働きたいものだ

〇〇省技師

「未明に起きて

夜半に帰るのハ

我慢するが

火の気あしの夜業

ごハ能率がサッパリ

拳うぬい、

何とかして貰ひたい

ものだ、



3078

惡戰酣ふり

皇軍ニューギニア
に血戦す

昭和十九年二月三日



3079

四民悉く武士

昭和十九年二月九日



彌次
「ヤー
喜太公、
おれは
南方へ行
くんた、
ヤルトと
いふから敵
が取りに
来る、
ヤラントと
改名しに
行くんだ。」

喜太
「ヤー
彌次さん、
面白いお、
おれは
驛馬賣へ
行って、
驛馬を買っ
て来るかい。」



3080

日米出征くらべ

昭和十九年二月十三日



妻「随分お手柄功名を

子「おとう様

僕も一しよに

いくさに行きたい。

夫「あ、

よく言ふた。

早く

大き

くふ

つて、いく

さに行くん

だよ。



妻「夫婦の仲を割いて

出征といふ法

はない

答です、

私はおまへ

を離さない。

夫

「その

通り、

私も

あふたとは

死んでも離れ

ません。



蜻蛉と蚊

昭和十九年二月十六日



⑥ 米蚊は日本の
蜻蛉の好餌である。

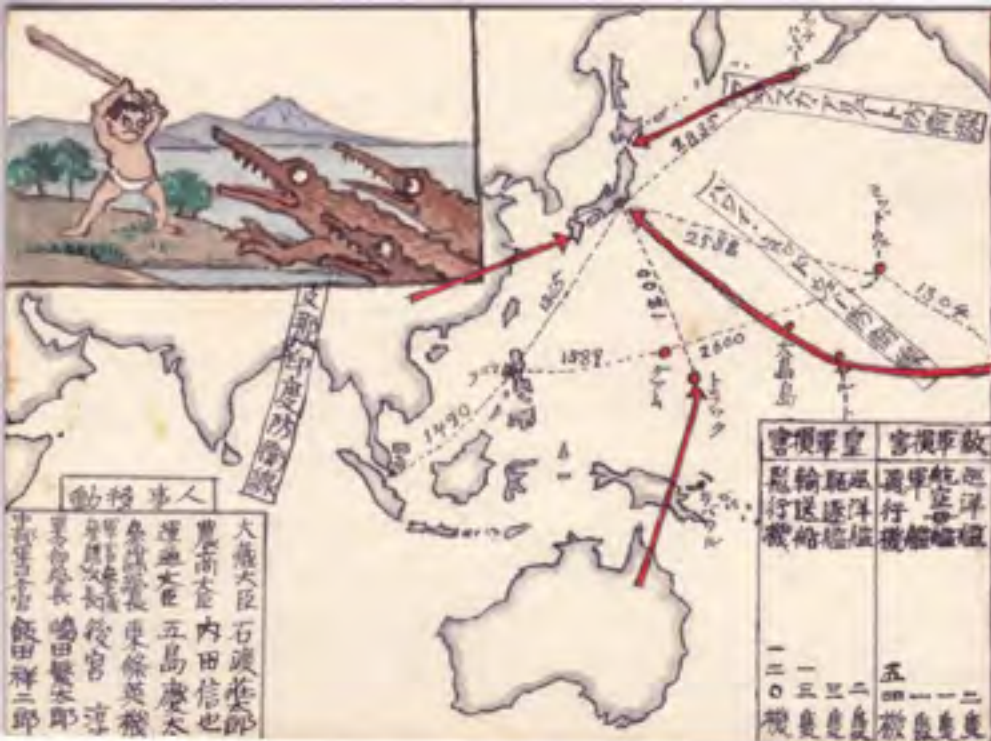


⑦ 「年に十二萬足の蚊を造るんだ。日本の数十倍の量だから負ける筈は無い。」



3082

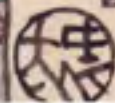
米軍大舉上る島を強襲す

ホールドウイン描く進路
昭和十九年二月十八日



3083

ケゼリンの鹿金戦全滅す
ルオットの皇軍卒五百
昭和十九年二月二十日



蠻敵暗いなり

昭和十九年二月二十五日



米「日本は無条件で降参するだろう。」

そうしたら

日本を

世界地図

から抹殺

し日本人

は奴隷

として

使役すれ

ばい。

○「その通り。」

若し日本が降参

しおくれは日本人は

こゝろ残さず殺して

仕舞へばい。

○「日本の財宝は

残らず僕に呉

れよう。



⑤

「怪しからぬ奴

等だ、刃の錆にする

迄もふいふぐり殺しはしてやろう。」



3086

東京に
於ける
贅澤追放疎開
昭和十九年三月五日



「敵の空襲は目眩にあろ、片時も早く疎開しろ。」

しろ。



六〇〇ヶ
歩数追放
不休
許可制
厳禁
停止
勸誘
激励

文に準ずるもの
劇場
官廳の日曜
旅行
買出し
新聞の夕刊
閑人疎開
減食粗食



「早く疎開しろ。」

疎開せ
疎開せ



3087

五大不調

昭和十九年三月十日

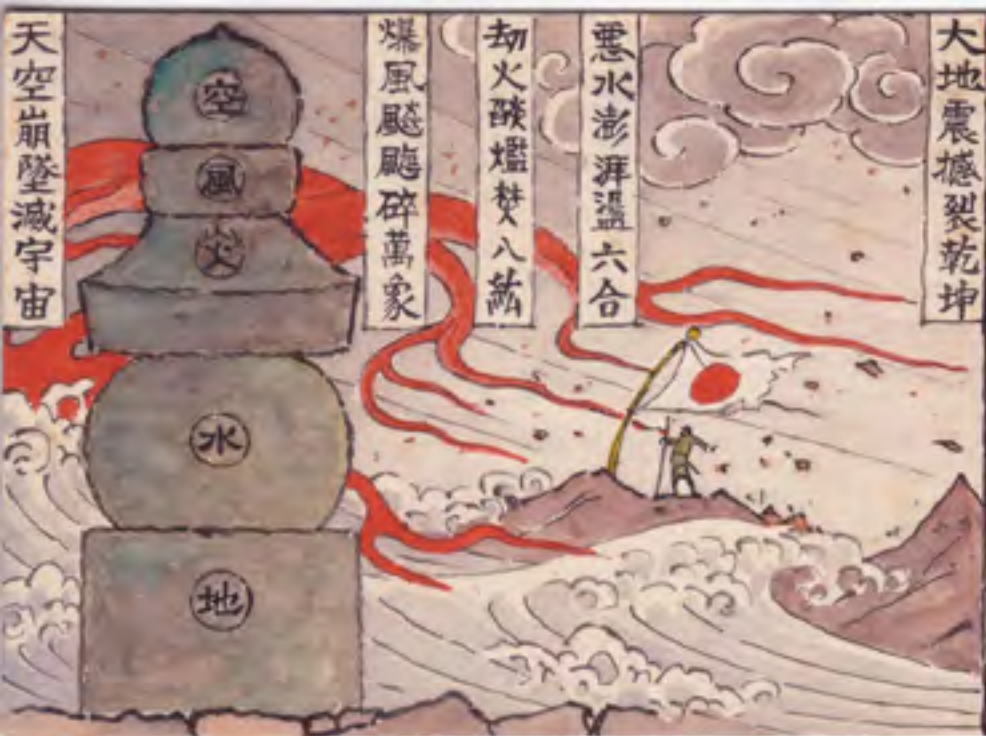
大地震撼裂乾坤

惡水澎湃盪六合

劫火燄燄焚八紘

爆風颭颭碎萬象

天空崩墜滅宇宙



3088

龍虎相容れず(海陸和)

昭和十九年三月十三日



君は陸軍だから、
結局山野の
猛獣

とて、
知が
足りふい。
知の事あら
僕の言ふ
ことを聴き、
ふさい。

陸

君は海軍だ
から、よく海を
知り、世界を
知つてゐるが、
勇が足りふい。
勇にかけては、
僕の所存に信頼
しふさい。

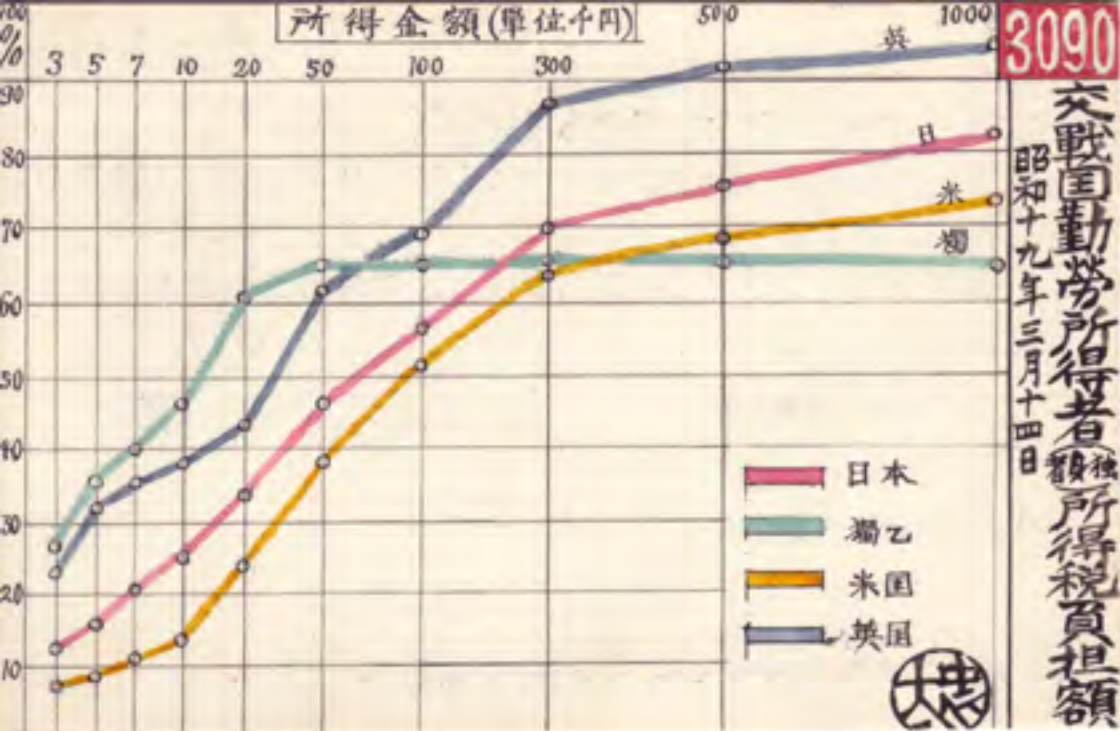


3089

未曾有の大戦場

昭和十九年三月十四日





3091

量よりは質

昭和十九年三月十九日



米の容積は日本の百倍もあるが
中空のブリキ細工だから
一貫目もない



日本の
容積は
米の百分の
一に過ぎないが
中實の黄金だから
十貫目もある。

3092

魔雲斗拔天敗魃

昭和十九年三月二十日

從是東 緬甸國
從是西 印度國



3094

鉢の木

(三月下旬
の大雪)

昭和十九年三月二十三日

常世

この雪でお寒からうに、
配給が足りないので

米飯も上げ

られず、

薪炭も無

いので、

大事お鉢植

の樹を伐つて

たき火をこしらへ

ましやう。

時頼

これ中へ

と馳走

さま、

わしは東

京の東條、

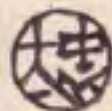
いやさ、北條の

時頼じゃ、

自然上京されたら
お越し下さい。

3095

陽と陰 陽は席に通じ
陰は湮に通ず
昭和十九年三月二十七日



1 請負者

総工費が丁度
六千万円
になりまふが...

軍

よろしい。
但し一日でも
日限を
かへらせ
たら
厭罰なる



3 請負者

一日限通り
着成しました。
配給の材料
が少し足り
餘りましたが

軍
そんな面倒な
ことは持ち出さ
んでもよい。
材料は使い
足した
ことに
して
置け。



2 請負者

三千万円丸儲
けだ、四千万
で充分
過ぎ
る。



4 請負者

こうまく行つたふ
餘つたセメント、他
鉄木材、その他
で五百万円
がこ
ろ
九儲
けだ。



3096

怪傑スターリン

ルーズウェルト
顔色ホシ

昭和十九年三月二十八日

スターリン「こら、ルーズとチャイ、よく聴け、

おれが真剣で独乙と戦うて

あるのに、一つも

加勢がしな

くせに、ヤレ

沿海州を借して

くねり、ヤレ日本

を焚火で焼くしろ

のこ、虫の

いし、注文

をね

だつ

のそ

手

に

乗

ふい

日本

は

戦

ない

ル

征

収

ルーズ



3097

逝ける人

自正月一日
至三月三十一日

昭和十九年三月三十一日



牧野殿男亮

木村一藏六

高安月郊六

木本源吉三

山本武走六

椿宮太郎

井野英一六

池田弘

金子直吉六

山形武夫六

岡田起作九

金子元臣七

アロスト子ケル七

飯野吉三郎六

近藤次繁八

岡本日盛六

湯川安太郎七

林 暉亮

崎山四太郎

飯田新七六

登坂又藏七

森田齋次六

男安場保健五

小倉 博六

鈴岡正年七

山科晃玉七

田分青崖八

久保田富太郎八

伊東延吉五

小管劍之助八

向 暉治六

小倉進平六

春木一郎七

目良 恒六

小山 温六

男黒田長和六

鈴木鈴馬

保利真直

稲垣長次郎七

小宮中平次郎九

山本信博六

田中經太郎六

森 廣藏七

安川雄之助五

佐藤安之助七

田中豊輔五

河合榮治郎五

井上嘉郎治

野口 遵

高橋理一郎六

中村勝磨呂七

秦 慧昭三

男山川 健五

堀 公一

名井九介六

森田三郎五

妻木忠太

辻 太郎

候音羽正彦

小林一郎

山本善治

ガンヂー主人

馬場 一衛六

3098

七色何時が無色に歸せん

昭和十九年四月一日



日本
獨逸
伊太利
ソ聯

米
英

蔣



3099

日ソ懸案妥結

昭和十九年四月一日



日本

北樺太石油石炭

の利権を移譲する。

『オホ油田の石油は向ふ五

年間毎年五万

バレルトンを供

給し王貴へるのハ

締結だ。

ソ聯

「漢業條約を

五年間延長する。

五年間だま

いふか。



3100

富嶽激怒當に噴火すべし

昭和十九年四月八日



噴火年記	皇紀	西暦
天應 元	一四四一	七八一
延暦 一九	一四六〇	八〇〇
天長 二	一四八六	八二六
貞觀 六	一五二四	八六四
全 一	一五三〇	八七〇
承平 二	一五九二	九三二
全 七	一五九七	九三七
天曆 六	一六一二	九五二
正暦 四	一六五三	九九三
長保 九	一六五九	九九九
寛仁 元	一六七七	一〇一七
長元 五	一六九二	一〇三二
永保 三	一七四三	一〇八三
全 一	全	全
永正 八	一五七一	一五一一
永禄 三	一五二〇	一五六〇
元禄 一三	一五六〇	一七〇〇
宝永 四	一七三七	一七〇七

